

第 6 号

発行 黄檗宗青年僧の会「大阪の集い」の有志
教化布教紙研究会
霊龜山 九 島 禅 院
〒550 大阪市西区本田3丁目4-18
Tel 06-582-5772

仏心ある生活を!

さちあ

「一杯のかけそば」と仏教

布施とらうこ

「一杯のかけそば」という童話があります。札幌に住む栗良平という童話作家が、実話にもとづいて描いたんだそうです。

先頃、衆議院の予算委員会で公明党の大久保書記長が、リクルート事件に関して、この童話を引用し、金権体質の国会議員を追求したところ、濡れ手でアワの国会議員のセンセイたちの胸を打ったのか、議場はその時しーんと静まりかえったのだそうです。産経新聞でも報道され

感動の渦をおこしているのです。ご存じな方も多いことでしょう。実はこの話には、以前、息子が、学校から帰ってくるなり、「感動したんや」とてもよい話だから、是非、お父さんたちも読んでえや」といったので、記憶がありました。学級の友達のお父さんが、この作者と友人で送ってもらったのを、担任の先

生が、プリントに印刷して、早速、子供たちに授業で紹介されたのだそうです。

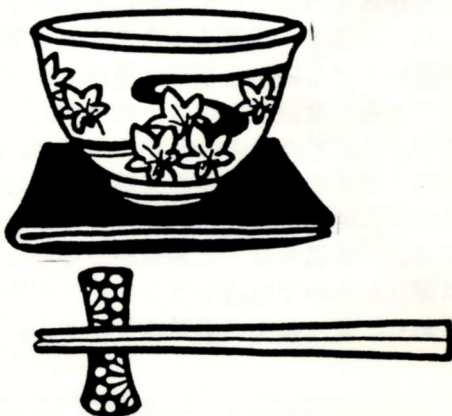
「一杯のかけそば」は、今から十五年ほど前の十二月三十一日、札幌の街にあるそば屋「北海亭」での出来事からはじまります。

大晦日の夜。客足もばったり止まり最後の客が出たところ、暖簾(のれん)を下げようとした時、十歳と六歳になる男子を連れて中年女性が入ってくる。

「あの・・・かけそば、一人前なのですが・・・よろしいでしょうか」

「おすおすと言う女性の後ろでは、二人の子供たちが心配顔で見上げています。」

女将は、暖房に近い二番テーブルへ案内しながら、カウンターの奥へ向かって、「かけ一丁！」と声をかける。



それを受けた主人は、チラリと三人連れに目をやりながら、「あいよ！かけ一丁！」とこたえ、ひと玉半をゆでて出す。

母子は一杯の年越しそばを三人で分けて食べた。額を寄せあって食べている三人の話し声がかウンターの中までかすかに届く。

「おいしいね」と兄。「お母さんもお食べよ」と一本のそばをつまんで母親の口に持っていく弟。

やがて食べ終え、百五十円の代金を払い、「ごちそうさまでした」と頭をさげて出ていく母子三人に、「ありがとうございました！どうかよいお年を！」と主人夫婦が声をかける。

翌年の暮れにも三人はやってきた。
 「あの・・・かけそば、一人前なのですが・・・よろしいでしょうか」
 女将は、昨年と同じテーブルへ案内しながら、
 「かけ一丁！」と声をかける
 「ねえお前さん、サービスとこういうことで三人前、出してあげようよ」
 そつと耳打ちする女将に、
 「だめだ。そんな事したら、かえって気をつかうべ」と言
 いながら、
 「あいよ！かけ一丁！」と答
 え、ひと玉半をゆでて出す。
 母子三人の会話が聞こえる。
 「・・・おいしいね・・・」
 「今年も北海亭のおそばが食べられたね」
 「来年も食べれるといいね」
 食べ終えて、代金を払い、出ていく三人の後ろ姿に
 「ありがとうございました！どうかよいお年を！」と主人夫婦は送り出した。
 翌年の大晦日の夜、北海亭の主人夫婦はそわそわと落ち着かない。二番テーブルの上には、すでに「予約席」の札が女将の手で置かれている。十時半になって、客足がとぎれるのを待っていたかのようになり、母と子の三人連れが入ってきた。

兄は中学生の制服、弟は昨年兄が着ていた大き目のジャンパーを着ていた。二人とも見違えるほど成長していたが母親は色あせた同じチェックの半コートの姿のままだった。
 「あの・・・かけそば、二人前なのですが・・・よろしいでしょうか」
 「えっ・・・どうぞどうぞ。さあこちらへ」と二番テーブルに案内しながら「予約席」の札を何気なくかくし、
 「かけ二丁！」と声をかける。
 それを受けて、
 「あいよっ！かけ二丁！」と答えた主人、玉そば三個を湯の中にほうりこんだ。
 二杯のかけそばをたがいにお腹あう母子三人の明るい声が聞こえた。
 「お兄ちゃん、淳ちゃん、今日は二人に、お母さんからお礼が言いたい」
 「実はね、死んだお父さんが起こした事故で、八人もの人にケガを負わせ、・・・保険でも支払いできない分を、毎月五万円ずつ払い続けていたのよ」
 「うん、知っていたよ」と兄。
 「支払いは年明けの三月までになつていたけど、実は今日ぜんぶ支払いを済ますことができたの」

「えっ！ほんとう、お母さん」
 「本当よ、お兄ちゃんは今新聞配達をしてがんばってくれてるし、淳ちゃんがお買い物や夕飯のしたくを毎日してくれておかげで、お母さん安心して働くことができたの。よくがんばったからって、会社から特別手当をいただいたの。それで支払いを全部終わらすことができたのよ」
 「お母さん！お兄ちゃん！よかったね！でも、これから夕飯のしたくはボクがするよ」
 「ボクも新聞配達、続けるよ」
 「淳！がんばろうな！」
 「ありがとう。ほんとうにありがとう」
 「今だから言えるけど、淳とボク、お母さんに内緒にしてる事があるんだ。それはね、淳が北海道の代表に選ばれて全国コンクールに出品されることになったので、参観日にその作文を淳に読んでもらうことになったんだ。その手紙をお母さんに見せれば、・・・無理して会社を休むのわかんから、淳、それを隠してたんだ。そのことを淳の友達から聞いたものだから、ボクが参観に行っただ」
 「そう・・・そうだったの」
 「先生が、あなたは将来どんな人になりたいですか、という題で、全員に作文を書かせ

たところ、淳くんは一杯のかけそばという題で書いてくれました。これからの作文を讀んでもらいますって。
 一杯のかけそばって聞いただけで、北海亭のことだとわかったから、淳のヤツ、なんでそんな恥ずかしいことを書くんだと心の中で思ったんだ。
 作文の最後に、十二月三十一日の夜、三人で食べた一杯のかけそばが、とてもおいしかったこと。・・・三人でたつた一杯しか頼まないのに、おそば屋のおじさんとおばさんは、ありがとうございました。どうかよいお年を！って大きな声をかけてくれたこと。その声は、・・・負けるなよ！がんばれよ！生きるんだよ！って言っているような気がしたって。それで、淳は、大人になつたら、お客さんに、がんばってね、幸せにね！って思いを込めて、ありがとうございました！と言えぬ日本一のおそば屋さんになりますって、大きな声で読み上げたんだよ。一作文を讀み終わったとき、先生が、淳くんのお兄さんに挨拶をしていただきましようって」
 「とっせん、言われたので、初めは言葉がなかったけど、・・・(略)・・・今、弟が一杯

のかけそばを読み始めたときボクは恥ずかしいと思いましたが、でも、胸を張って大きな声で読み上げている弟を見ているうちに、一杯のかけそばを恥ずかしいと思う、その心のほうが、恥ずかしいことだと思いました。

あのとき、一杯のかけそばを頼んでくれた母の勇気を、忘れてはいけないと思います。兄弟力を合わせ、母を守っていきます。これからも淳と仲良くして下さいって言ったんだ。

昨年までとは、打って変わった楽しげな年越しそばを食べ終え、三百円を支払って出ていく三人を、主人と女将は一年を締めくくる大きな声で「ありがとうございました！どうかよいお年を」と送り出した。

その後、親子の姿は北海道からふっと消える。しかし、店では毎年大晦日になると、三人が座る二番テーブルをあけて待つ。改装した時も、このテーブルとイスだけは古いままにしておいた。そして十五年がたった。大晦日、立派になったふたりの青年と和服姿の婦人が現れる。あの親子だった。母親がこう注文する。

すが・よろしいでしょうか。店の主人夫婦の目がうるむ。「あいよっ！かけ三丁！」

「一杯のかけそば」は、交通事故で一家の柱を失い、一人前のかけそばを分けあって懸命に生きる母子三人。そしてそれを察して一杯半をつくって、そっと差し出したそば屋の主人夫婦との心の交流をとおして、どんな逆境にあってもくじけない強さ、隣人愛の大切さ、すばらしさを訴えています。

仏教には「布施」という言葉があります。仏道修行の「六波羅蜜」のうち、第一番目にあげられているのが、「布施」なのです。「布施」といえば、一般に金銭や物品を「お寺さん」へプレゼントすることのように考えられています。お寺さん、お布施といいますが、それは「財施」といって、布施の一部なのです。「お寺さん」相手の施しでなくとも布施です。また財施でなく、他人にやさしい、いたわりの言葉をかける行為だって立派な布施なのです。たとえば、「雑蔵法経」という仏典に「無財の七施」というのが紹介されています。

- ①眼施（がんせ） やさしいまなざしをもって他に接すること。
- ②和顔悦色施（わげんえつきせ） 柔和なほほえみをもって他人に接すること。
- ③言辞施（ごんじせ） 思いやりのこもった言葉で他人に接すること。
- ④身施（しんせ） 身をもって思いやりを示すこと。
- ⑤心施（しんせ） 形だけでなく、自らのまごころを示すこと。
- ⑥床座施（しょうざせ） 他人に座席を気持ちよくゆるすること。
- ⑦房舎施（ぼうしゃせ） 宿泊や休憩の場所を気持ちよく提供すること。

以上の七つをいうのですが、このように、たとえ貧しく、金品はなくても、思いやりや心尽くして相手に喜びや安心を与えることができるのです。しかし「布施」が真の「布施」になるためには、三つのものが浄（きよ）らかでないといけないとされています。

①施す人の気持ち たいいていの人は、人に物をあげるとき、つい優越感を持ってしまいます。オレがオマエに恵んでやっているのだゾ

②受ける人の気持ち 布施を受ける人が、それを受け取ることによって卑屈になるようでは真の布施ではないのです。だから、乞食ははじめから卑屈になっていません。だから、乞食に物をあげるのだから、乞食に物をあげるのわだかまりもなく貰って、なんらだかまりもなく貰って、なんらなるのです。

③施す物 泥棒した品物や汚職で得た金銭を施しても、布施にはならないのです。また、自分に不要な物を人によって、それで布施した気持ちになっただけでいけません。自分の大事なものを施すのが布施なのです。歳末たすけあいや、災害地への援助などで着古した、それも洗濯もしていないようなボロを送るような人がいると聞いたことがあります。それは「布施」ではないのです。布施は年末の大掃除ではないのですから。

このように、三つのものが清浄でなければいけないので

仏壇はこころの拠りどころ

お仏壇の購入は、いつがよいのか？

お彼岸にちなみ、お仏壇のお話しをしたいと思います。ある仏壇屋さんの調査によりますと、仏壇購入の動機および時期は、①永年の念願がかなったとき ②お盆、お彼岸を機に ③新築時 ④各自の法事、の順だそうです。

仏壇購入動機のトップである「永年の念願がかなったとき」というのは、たいへん素直な動機で結構なことだと思います。

自分や家族のだれかが大病にかかったが、苦勞のかいあって全快した、低迷していた会社の業績が上昇した、待ちに待った子宝に恵まれた、など永年の念願の内容は、人によってさまざまですが、理由はなんであっても、仏壇を購入することは、「自分の念願がかなったのも、ご先祖のおかげ」という感謝の気持ちが、素直にあらわれているからです。

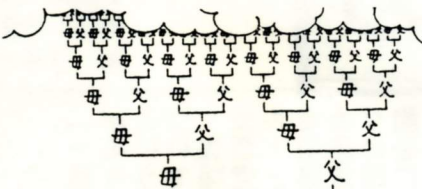
もちろん、葬儀や法事など、必要にせまられて仏壇を購入するというのも、立派な理由なのですが、もっと自由に考えてもよいと思います。そもそも、仏壇とは仏教という信仰のシンボルであるとともに、ご先祖の御霊(みたま)祀り、日常生活の平安に対する祈りと感謝の誠を捧げるためのものです。

私たちはみんな、お父さんお母さんがあって生まれてきたのです。お父さんお母さんも、また両親から生まれてこられたのです。こうして親の代から10代遡(さかのぼ)りますと、私たちのご先祖は1024人となり、15代遡りますと実に32768人のご先祖がおられるのです。更にそれが25代遡りますと驚くなかれ、なんと3355万4432人となるのです。この数字の計算は間違いではないかと疑問に思われる方がおありでしょうが、決してでたらめな数字ではないのです。

このように私たちの今日があるのは、過去無量のご先祖のたまものなのですから、ご先祖に感謝したいと思ったら、それをきっかけにお仏壇を購入されたらよいと思います。

なお、「仏壇を買うと新仏がでる」という説がありますが、これは葬式がらみで仏壇を買うケースが多いところから生まれた迷信であり、まったく根拠はありません。

(編集子)



す。仏教では、これを、「三輪清浄(さんりんしょうじょう)の布施」とよんでいいます。そして、そのような清浄な布施こそ、仏道修行の第一歩なのです。とかく、ギスギスしたこの世の中であって、わたしたちは少しでもそのギスギスをや

わらげようと努力したいものです。そうした努力がまさしく「布施」なのですから。「一杯のかけそば」は、隣人愛、仏教でいうところの布施の精神の大切さ、すばらしさを語ってやまないのではな

(九島)

編集集後記

○元号が平成にかわりました。毎日の生活に特別な変わりはないが、何か心改まる気がします。新時代にむけて、さらにいっそう精進していきたいと決意を新たにしています。

○昨今、宗教ブームだそうです。でも、何が本当の宗教か判らなくなっているようです。「請求書の宗教」を求めているように感じられます。本当の宗教は「領収書の宗教」でなければいけないと思います。(編集子)